

平成 30 年 4 月 22 日

南の風 268

南部ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

しかし、Aチームのベンチは攻め方を変更する様子はありません。Bチームは相手のオフェンスの攻め所を捉え、楽なシュートを打たせません。じりじりと流れがBチームに傾きます。Aチームはオフェンスが上手く機能しないため、ディフェンスにも影響がでます。一気に差が開きます。その後4Qに入っても、攻め手（ピック&ロール）が単調なまま、流れが変わらずAチームは敗れてしまいます。

このゲームを観て私が感じたことは、Aチームのベンチにオフェンスの具体的な指示がほしかったことです。オフェンスの流れが悪いのですから、形に拘らずに1対1の力強い攻めをするとか、走って速攻パターンにしてみるとか（練習していないプレイは無理ですが）、あるいはディフェンスの形態をプレスにしてみるとか、何らかの打開策を打ちたかったです。（指示はあったのかもしれませんが）

繰り返しますが、ゲームというのは描いた戦略・戦術通りにはいかないものです。予めコーチが立てたストーリーに拘り続けると、相手の思うつぼにはまってしまうのです。つまり、コーチは時には自分が立てたストーリーを変更しなければなりません。状況に応じて修正しなければならないのです。コーチがその作業を即座に、躊躇することなく、かつ的確にできるかどうか、勝敗の行方を大きく左右してしまうのです。そのまま放置する時間が長ければ長い程、勝つのは難しくなるのです。

また、ゲームには「勝敗を分けるポイントとなる瞬間」というものが存在します。英国ではそれを、「クリティカル・モーメント」と呼んでいます。不利な状況が一瞬で逆転したり、ワンプレイで流れが変わったり、「あそこでミスをしなれば勝てたのに・・・」というような瞬間です。優秀なコーチは、それがどの場面であったのかを、ゲーム後に的確に説明することができるものです。

平尾 誠二氏（「ミスターラグビー」とよばれた。元全日本代表ラグビー選手、元全日本ラグビー監督、2016年10月22日永眠）は、「クリティカル・モーメント」について、著書のなかで次のように言っています。

どの競技にも言えることだが、とくにラグビーというゲームはめまぐるしく攻守が入れ替わり、プレイがなかなか止まらない。それゆえ、その状況、局面を的確につかまえ、流れを引き寄せることが非常に重要なのだが、英国人はリーダーに限らず総じて、一瞬のプレイがゲーム全体におよぼす影響を客観的に把握する能力が高い。対して、日本人は往々にしてクリティカル・モーメントを見極めるのが下手だ。「ここぞ」という勝負どころにおける判断が遅れる。判断の遅れは決断の遅れにつながる。結果として勝機を逃すことになる。

いったいなぜ、日本人はクリティカル・モーメントの見極めが苦手なのか。

ひとつには、自分自身で考え、判断し、決断する機会が乏しいことがあげられるだろう。日本では、子どものころから家でも学校でも親や教師のいうことに従っていればよしとされる風潮がいまだに根強い。とくに最近、危険や困難を親や教師が取り除いてしまうことが多く、それでは子どもみずから判断し、行動する習慣は身につかない。

平尾氏は、リーダーは自らクリティカル・モーメントを見極める能力を磨くべきと言っています。